

非武装中立を守れば外国の侵略を受けるはずがないという事が確かなものならば、こんな気楽で安上がりで、結構なことはあるまい。しかしそれは全くばかげた事だ。非武装を堅持しようとするならば、霸道国家の暴力に蹂躪される事もあり得るものと覚悟しなければならぬので、見方によっては、これは膨大な軍備を持つ事より何倍か苦難の道であろう。

戦争が人類のある限りなくなならないものならば、暴虐な霸道勢力の蹂躪を永久に耐え忍ぶ事は出来ないから、われわれはどんなに苦しくとも他国の侵入を防ぐ武装を営々として「臥薪嘗胆」で建設しなければなるまい。たとえ何年かかろうとも。

最終戦争史観に立てばこそ、短い期間の忍耐によって戦争の無い新世界を開く為に、日本人全体が全人類に代わって十字架を背負う事を国民の誇りとする事ができるのである。

いかに苦難の道であろうとも、それが日本国民の運命であり使命なのだ。

・・・これが石原莞爾の最後に到達した考えであったと私は信じている。

以上が今は亡き実弟六郎氏の考察である。私の無学で言葉足らずが真実の意とする処を表現できなかったかもしかもしれぬが、六郎氏逝去後、掘り起こされた関係資料を補足して戦争放棄の真意義に迫ってみたい。

永久平和誌 55号（平成 12年 5月 20日発行）より、野村乙二朗先生解説の石原莞爾未解読日記、昭和 18年を手始めに掲載される事になった。

解読の本格的作業に入ったのは昨年（2009年）からで、サークルの特徴は野村先生の助言者として武田邦太郎先生、淵上千津氏、後藤昌次郎氏、戸辺栄一氏、菅原一彪氏等が歴史の一証人として列席された事である。

その過程で明らかになった事実がある。59号記載の日記、

昭和 20年 12月 25日第 1日世界観本質止

12月 26日第 2日東亜連盟ノ結成ヨリ教育革新迄昨夜大体止ル

とあり、61号掲載の昭和 21年日記には（7月 8日 我等ノ世界観要領ヲ書キアグ）とあり、東亜連盟がマッカーサーの指令により解散後、国民党として再出発する為のテキスト（我等の世界観）第二章新日本の進むべき道の中で戦争放棄の真意義を説いている。

六郎氏が「身に寸鉄を帯びず生活そのものの力によって」の構想の時期を昭和 20年の 10月以降とされたが、この日記から 12月 25日には構想を完成していたと考えられる。以上の資料を勘案すれば、「戦争放棄」の原案は石原莞爾ではなかったろうか？

昭和史は興味尽きない真実があるようだ。

提案の根拠とする将軍の文献を掲げる 第3章 世界の統一の一節より

……人類前史が終わるまで即ち最終戦争の時代は20年見当であろう。言い換えれば今から30年内外で人類最後の決勝戦の時期に入り、50年以内に世界が1つになるだろう。

最終戦争論の結びの一説

世界の決勝戦というのは、そんな利害だけの問題ではないのです。

世界人類の本当に長い間の共通の憧れであった世界の統一、永遠の平和を達成するには、なるべく戦争などという乱暴な、残忍な事をしないで、刃に血塗らずして、そういう時代の招来される事を熱望するものであり、それが、われわれの日夜の祈りであります。

しかしどうも遺憾ながら人間は、あまりに不完全です。

理屈のやり合いや道徳談議だけでは、この大事業は、やれないらしいのです。

世界に残された最後の選手権を持つ者が、最も真面目に最も真剣に戦って、その勝負によって初めて世界統一の指導原理が確立されるでしょう。だから数十年後には迎えないと私たちが考えている戦争は、全人類の永遠の平和を実現する為の、やむを得ない大犠牲であります。

われわれが仮にヨーロッパの組とか、あるいは米州の組と決勝戦をやることになっても、断じて、彼らを憎み、かれらと利害を戦うものではありません。恐るべき残虐行為が行われるのですが、根本の精神は武道大会に両方の選士が出て来て一生懸命やるのと同じ事でありませぬ。

人類文明の帰着点は、われわれが全能力を発揮して正しく堂々と争う事によって、神の審判を受けるのです。……こういう時代の大きな意義を一日でも早く達観し得る聡明な民族、聡明な国民が結局、世界の優者たるべき本質を持っているということです。その見地から私は、昭和維新の大目的を達成する為に、この大きな時代の精神を一日も速やかに全日本国民と全東亜民族に了解させることが、私たちの最も大事な仕事であると確信するものであります。